## 三角屋より愛を込めて。

私は愛しているんだ。
パーティーを愛しているんだ。
そこに集まる人々を愛しているんだ。
ニヤつきながらする準備を愛しているんだ。
再会の握手を愛しているんだ。
笑顔で語らう姿を愛しているんだ。
酔っ払った真っ赤な顔を愛しているんだ。
無口に物思いに耽る姿を愛しているんだ。
愛を頼りに選ばれた音を愛しているんだ。
体が自然に揺れる姿を愛しているんだ。
巻き起こる一体感を愛しているんだ。
人知れず行われる親切を愛しているんだ。
走りまわる子供達を愛しているんだ。
赤ん坊をあやす姿を愛しているんだ。
人生をかけた者の最後の一音まで愛しているんだ。
それに聴き入る姿を愛しているんだ。
感動して泣く姿を愛しているんだ。
興奮してあげる声を愛しているんだ。
空間を埋め尽くす言葉を愛しているんだ。
沸き起こる拍手を愛しているんだ。
やり過ぎてしまった姿を愛してるんだ。
美味しいと伝えてくれる事を愛しているんだ。
西陽に揺らぐ珈琲の湯気を愛してるんだ。
ジュースを待ち望むその眼差しを愛しているんだ。
一心不乱に賄いを頬張る顔を愛しているんだ。
満足そうな顔をして家路につく姿を愛しているんだ。
そのどれもが、美しく息する時間。
私は愛しているんだ。
みんな心よりありがとう、三角屋より愛を込めて。

---

## 三角屋六周年祭

話は、二〇二十二年。素晴らしい、五周年パーティーが終わった春先。突如として、脳内に閃光が走った。この仲間達とならば、兼ねてから一緒に遊んでみたかった、北海道は札幌の“THA BLUE HERB”にオファーを出してもいいのではないだろうか。そう気付いてから、夜も寝れずに私の頭の中はその事でいっぱいになった。夜な夜な、予算や場所を考えれば考えるほどに、彼らの存在が遠のいていくのは明らかだった。私にとって、そのぐらい、彼らの存在は大きく、ドキドキする対象なのだ。

五月の吉日、自分の中のワクワクが上回った事を確認し、唯一の問い合わせ先である、メールアドレスに私なりの渾身のオファーを送った。そして、結果はすぐに来た。それも、代表のBOSSさん本人から、オファーを引き受けてくれるメールが来た。私は、ついにこの時が来たと舞い上がり、同時に、いくつかの歌詞に記されている通り、未だに代表自ら仕事の管理をしている事を知り、どこまで本物なんだよと感嘆の涙を流した。

そんな夢心地も束の間。よくよく考えてみれば、これはお店の感謝祭であって、サンドイッチをいつも買って頂き、私たち家族の生活を支えてくれている常連さん達には、別にTBHなんて関係無いことに気づいた。むしろ、複数の仲間達のこだわりのお店が並ぶマルシェの方が、間違いなく喜んでくれる事だろう。だとすれば、知らないアーティストの為に入場料を数千円払って、さらに買い物する姿は想像できないし、それでは、出店者さんにも声をかけづらい。「OK、わかった、無料で行こう。」その代わり、全員が参加者として一緒につくり、遊んでもらおう。

正直に書くが、小さな飲食店に、大きな貯蓄があるわけではない。それでも無料、投げ銭でやる意味はある。近年では、誰もが無料で見物できる花火大会も廃止が相次いでいるようだ。原因はいくつかあると思うが、無料に集まった沢山の人を誘導する、多額の警備費が大きな要因の一つのようだ。これは、新型コロナ流行以前から問題視されていたようで、流行を契機にいよいよ廃止の決断が増えたのだ。また、室積でも、祭りの翌朝の町はゴミだらけで、遊んでおいてやりっ放しの光景は、Good vibesとは程遠いと感じる。

もし、「一人一人がパーティー参加者として、自分の事として、ゴミを拾ったり、駐車場やトイレの位置を教えたり、誰の子供であろうが少しだけ気にかけてあげたりすればどうだろうか？」素晴らしいじゃないか。これは特別なことではなく、誰もが自分のホームではそうしているはずだ。つまり、良心の元、当たり前のことを、当たり前にやって貰えばいいのではないだろうか。

もちろん、パーティーは生き物だ。どうなるかは分からない。私の手から既に離れ、毎日グングンと成長し始めている。それは、口伝いに仲間達が宣伝してくれていたり、当日をワクワクして待ってくれていたりするからだ。私の目に見えない領域で、みんながどんどん育てているのだ。種を勝手に撒いておいて何だが、本当に感謝している。私が唯一種に込めた想いがあるとすれば、「お互い様」が育ち、美しい花が咲いて欲しいということだけだ。この花が咲けば、この先、どんな困難があろうとも、私達はいつでも同じ船の上で笑い合えるはずだ。三角屋六周年祭が、そのきっかけになるのなら、無料でも種を撒く甲斐があると私は言える。